

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

「キリスト教主義教育プロジェクト」 公開研究会報告

「社会」の発見とキリスト教

ー 関西学院と神戸・阪神間地域におけるー

講師 関西学院大学社会学部教授 荻野 昌弘
報告者 RCC主任研究員 東 よしみ



いただきました。荻野先生とプロジェクトメンバー八名は対面で参加しましたが、一六名の参加者にはオンライン参加をお願いしました。

まず、荻野先生は、社会学とキリスト教との密接な関係を指摘されました。社会学的な研究は、見知らぬ他者といかに接し、いかに働きかけるか、とりわけ「禍」の中にある人々にどう接するかを探究する学問です。聖書は、イエスが他者、とりわけ禍の中にある他者とうまく関わるのかを語ります。この意味において、聖書を社会的な書として読むことができるという指摘がなされました。

次に、日本に社会学が導入

された際にキリスト者が大きな役割を果たしたことが、米田庄太郎、賀川豊彦の二人の例から議論されました。被差別部落の出身であった米田は、宣教師アイザック・ドーマンと出会う中でキリスト者となり、アメリカ、フランスで学び、京都帝国大学で教鞭をとりまします。日本における社会学の礎を築いた米田の学問の中には、貧困と差別を社会問題として捉える志向性を見ることができきます。また、賀川豊彦は、神戸神学校在学中から、スラムの支援を行い、スラムの子供たちのための林間学校などを通して関西学院の学生たちとも交流しました。賀川は、関西学院の図書館を利用し、第四代関西学院院長 C. J. L. ベーツと交流をもち、一九五五―五八年には関西学院の理事を務めました。ベーツは賀川を高く評価し、賀川は何度も関西で講演を行いました。

さらに、関西学院における社会学の歴史を見ていきました。一九〇四年に宣教師の T. H. ホーデンが社会学を講じて以降、社会学科が創設さ

れるまでの間は、ベーツらが社会学部で社会学を講じました。一九一二年に創設された高等学部文科の文科学長に就任した小山東助（組合教会の海老名弾正門下のキリスト者）は、英文科、哲学科、社会学科を設けましたが、とりわけ社会学科創設に意欲を見せました。小山は、ミッシェンスクールにはソーシャルワーカーの養成や総合的な社会指導理論の把握が不可欠であると考え、当時はまだ広く知られていなかった「社会学科」という名称を採用しました。

小山が去ると、一九一八年に、キリスト者であった河上丈太郎が専任教員として赴任します。河上は一〇年ほど関学で教鞭をとった後、衆議院議員となり、戦後は、社会党委員長を五期務めました。河上は、関学に着任後、一九一九―一九二〇年に社会学の集中講義の担当者として『社会学原理』を刊行したばかりであった高田保馬を招きました。

一九二一年には社会学の専任教員として新明正道が着任し、『社会学序説』を上梓しま

二〇二二年七月九日（金）
一七時一〇分～一八時四〇分に「キリスト教主義教育プロジェクト」の公開研究会が、関西学院会館「翼の間」で行われ、「社会の発見とキリスト教ー関西学院と神戸・阪神間地域におけるー」という題で社会学部の荻野昌弘教授にご講演を

す。一九二三年には松沢兼人が着任し、社会政策を講じました。河上はベーツを通じて賀川との知己を得ました。社会学科の専任教員である、河上、新明、松沢の三人は、賀川が一九二二年に安治川協会に開校した大阪労働学校の講師を務めています。

次に、阪神地域における市民意識の誕生にキリスト教が関わっていたことが指摘されました。一九二〇年頃から阪神間での住宅開発がはじまり、そこに移住してきた新住民の階層が地域を変えていきました。その事例が一九二一年の灘購買組合（コープこうべの前身）の誕生です。きっかけは、住民の那須善治が財産を公共のために使うことを希望し、賀川の協同組合の発想に共感したことです。賀川は、「社会改造」は愛と連帯意識によって可能になると考え、経済的な互助的な組織である協同組合をつくり、その利益を公共的目的のために用いることが望ましいと考えました。この時期、資本家・企業経営者とホワイ

トカラー層が、阪神間地域に新たな居住地を選んで新しいコミュニティを形成しました。ここに民主主義への志向性と市民意識の芽生えが生まれますが、そこには、愛と他者との連帯というキリスト教の意識を見ることができません。日本において、キリスト教

は、社会の存在を発見し、認識する観点を提供しました。実際に社会を改良していく際には、国家を通じた社会改良事業へと進む流れと、社会の現実を捉え、政策提言する流れとが生まれました。河上らの関西の流れは後者の、下から上への流れに位置付けられます。阪神間地域では、国家からではなく、社会から現実を捉えようとする方向性が生まれ、そこには、愛と他者との連帯というキリスト教的な意識が強く働いていたのです。

大変に興味深く啓発的な講演の後、活発な質疑応答がなされました。コロナ禍における関西学院での教育のあり方について考えを深める貴重な機会となりました。

キャンパスの中のキリスト教シンボル (15)

RCCセンター長 打樋 啓史

今回は社会学部チャペルの正面に掛けられた大きなバナー（垂れ幕）を紹介します。このバナーは二〇〇七年に、現在のチャペルではなく、建て替え前の旧社会学部棟の大教室兼用チャペル正面に設置するために作成されました。当時社会学部におられたグルーベル宣教師と宗教主事の私で、視覚に訴えるシンボルをチャペルに導入することを計画し、原図としてキリスト教版画家・



柴田みどり氏の「ヨナ」と題された作品を選びました。図版をフィリピン・マニラ市にあるキリスト教系施設「ドール・センター」に送り、当センターでバナーとして仕上げていただいたのです。ドール・センターは貧しい女性たちの自立を支援する施設で、人形やバナーなどを受注・作成していました。

赤を背景として中央に描かれた大きな魚には、二重の意味があります。原図タイトル通り、まずこの魚は旧約聖書・ヨナ書の大魚を表しますが、同時にキリスト教では魚がイエス・キリストのシンボルとされてきたことに基づき、キリストを表しています。魚がイエス・キリストを表すようになった理由は、湖の多いガラヤ地方で生きたイエスは魚と関わりが深かった（よく魚を食べた）こと、そしてギ

リシア語で「イエス・キリスト、神の子、救い主」と書いたとき、頭文字が「魚」を意味する「ΙΧΘΥΣ」（イクテュス）になるということでした。ローマ帝国による迫害下で、初期のキリスト教徒たちがキリストの「隠れシンボル」として魚の絵を用いたことはよく知られています。

そのようにヨナ書の大魚とイエス・キリストを重ねた魚の内部と周囲に、イエスの生涯の場面（降誕、洗礼、エルサレム入城）、キリストや聖霊を表す象徴（十字架、百合、ぶどう、A「アルファ」とΩ「オメガ」、鳩、炎）が描かれています。色としては背景の赤以外に、各場面や象徴に、白、黒、黄、紫、緑などの典礼色を基調とした原色が効果的に使われています。このバナーは明るく鮮やかな色彩をチャペル全体に与えると同時に、聖書の物語を視覚的に伝える役割を果たし、さらに作成してくださったフィリピンの人々の心と手の働きを思い起こさせてくれるものです。